

# Chinese Resident' s Behavior and Preference toward Source Separation of the Household Kitchen Waste : A Case Study in Beijing City

袁, 亜林

<https://hdl.handle.net/2324/1544027>

---

出版情報 : 九州大学, 2015, 博士 (農学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (2, 3)

氏名	袁 亜林			
論文名	<b>Chinese Resident's Behavior and Preference toward Source Separation of the Household Kitchen Waste: A Case Study in Beijing City</b> (中国住民の家庭系食品廃棄物の資源分別に関する行動と選好：北京における事例研究)			
論文調査委員	主査	九州大学	教授	矢部光保
	副査	九州大学	教授	伊東 正一
	副査	九州大学	教授	福田 晋

## 論文審査の結果の要旨

中国における家庭廃棄物のリサイクル率の向上は、環境政策において重要な意味をもつ。特に、家庭ゴミの分別は、市民レベルにおける持続可能な社会の実現に大きく寄与することが期待される。

まず、本研究では北京市住民の生ゴミ分別プログラムに焦点を当て、無作為に 400 世帯を抽出して面接調査により 2013 年にデータを収集した。そして、生ゴミ分別行動の決定要因、および生ゴミ分別サービスの価値とその形成要因を分析した。

生ゴミ分別行動の決定要因としては、5つの心理的要因、すなわち、態度、認識行動管理、主観的規範、道徳的規範、責任否認である。構造方程式モデルによる分析結果、道徳的規範が最も重要な要因であり、主観的規範は責任否認よりも影響力が大きい。他方、態度は、期待された符号条件と逆であり、マイナスの効果を持つことが明らかになった。これらの要因によって、分別行動の 50.3%ができる。このような分析結果は、地方政府による市民の分別行動の推進において、重点的に強化すべき対策を示唆するものである。

次に、分別サービスの選好分析において、住民は、平均して、収集頻度の多さ、夕方の収集、コアンター収集よりもプラスチック袋収集を好むことが明らかになった。年齢別では、若い住民は収集頻度のみを重視し、他方、中高年の住民は夕方の収集で無料のプラスチック袋を重視し、分別行動に対して補償を要求する傾向があった。さらに、潜在クラスモデルの分析でも 2つのグループが抽出され、サンプルの 70.1%を占めるグループは、教育水準が高く、若くて、分別の経験があるグループであって、夕方の収集サービスを好む傾向があったが、生ゴミ分別に対する補償や指導は求めていなかった。他方、残りの 29.9%を占めるグループは、教育水準が低く、年齢が高く、分別の経験がないグループで、このような分別プログラムには参加したが見られた。このグループは、収集頻度が高く、プラスチック袋を好み、分別に対する補償を求める傾向が見られた。

さらに、仮想評価法による分析において、回答者の 41%は、多様な提示額での生ゴミ分別収集サービスに対する支払いに合意した。生ゴミ分別サービスに対して、平均支払意志額は 1.44 ドル/月であった。また、生ゴミ分別収集サービスに対してプラスの支払意志額を持っている人々は、日常的に分別行動を行っている人々であった。この分析結果は、いかなる住民にどのようなアプローチをとればよいか、政府の生ゴミ分別サービスの方向性を示唆するものである。

以上、本研究は、最新の分析手法を用いて、中国における有機性廃棄物の循環利用と生ゴミ分別の推進において重要な方向性を示唆するものであり、学術的価値の高い研究と言える。よって、本研究は博士（農学）の学位に値すると認める。